

市民の都市生活と博物館

ハーレムのテイラー博物館とその周辺

稲賀 繁美

国際日本文化研究センター教授
総合研究大学院大学教授

地球
ミュージアム
紀行

情報のスピードがいまなお加速しつづける現代。
「おたから」を陳列するだけでは、
人びとは「ミュージアム」になかなか足を運んでくれないのかもしれない。
「ミュージアム」のあるまちの景観との調和や、来館者との関係性が重要になりつつある。

最古の博物館

二一世紀の一〇年代、たいていの博物館・美術館へはインターネットでアクセスできる。展示内容も居ながらにして概略をとらえることができる。若い世代には、わざわざ海外まで遠路足を運ぶなど、もはや徒労と見る向きもある。展示品陳列だけでは、とても映像動画に敵わない。入館者数の減少をとどめるには、単独の博物館施設だけでは、もう対応できない。そこで登場するのが複合型のテーパーパーク展示だろうが、日本の場合、行政の縦割りの制約が足かせとなる。

オランダ・ハーレムのテイラー博物館といえば、現存する最古の博物館といわれるが、博物館の、今後のひとつのあり方を、ここから見出すことはできないか。古代ローマ風の重々しい入り口をくぐると、古色蒼然たる化石や往年の物理・化学実験器具の陳列室に続いて、円蓋の天井から陽光が差し込む、楕円形の天文・地学資料の展示室が広がる。この部屋の中央には鉱物標本を収納したガラス・ケースがあり、当時考えられていた太陽系の模型がケースの天頂部に据えられている。回廊を巡らした吹き抜けの二階部分の壁面は書架となっており、この空間は一八世紀の創建当時の雰囲気や今に伝える努力がなされている。そこを右手に進むと、絵画を並べた回廊や自然誌の部屋がちらちらとあり、科学と人文学とが未分化だった時代の雰囲気も髣髴とさせる。その先の



運河にかかった跳ね橋の上から、テイラー博物館を眺める

中庭は、すっかりリニューアルされて、明るいガラス張りのテラスにカフェが設けられている。充実しているのが購買部で、最近開催された展示の図録のみならず、地球の歴史に関する書籍やCD、恐竜の模型や陶磁器といった記念品から宝飾品にいたるまで並べられている。店番のお爺さんはあらゆる分野に造詣が深く、こぼれ交わすことも楽しい。情報収集でもじつに重宝する。

都市環境と博物館

このテイラー博物館が、今後の博物館のあり方を見出すモデルになる、というのは、都市全体が現在に生きていながら、歴史都市の景観も維持しており、そうした環境のなかに博物館がきちんと位置づけられ息づいているからだ。

ハーレムの町の中央にある運河沿いの建築群は、その姿を水面に映しており、朝から晩へと太陽が動くにつれて、町は刻々と表情をかえてゆく。ときおり貨物を満載した船が航行すると、水位を調整しては水門が開き、跳ね橋が跳ね、あるいは回転橋が九〇度ぐるりと回転して、船の通航を促す。そうした運河の生き様を前景とするなら、その背後にはハーレムの大聖堂が聳えるようにして控えており、市庁舎とその周辺の広場には、夏の午後など、休息する市民の姿を見かける。

フランス・ハルス美術館も徒歩でわずかな距離だが、こちらは街並みそのものが歴史風紀地区となっている。

オランダの都市でこうした広場の野外カフェに腰をおろすたびに、似たような施設がうまく稼動しない日本の都市生活が情けない。梅雨時は水に濡れ、夏は暑すぎる日本列島では、そもそも戸外の都市生活は満喫できない宿命にあるのだろうか。



ハーレムの町の遠望（列車の車窓から）



ハーレム旧市街地鳥瞰図（書店の飾り窓に貼ってあったポスター）

絵画回廊の床にほどこされた温風送風機の透かし蓋からも創建当時の面影がかんじられる

